

＊ ＊ 攻撃行動 ＊ ＊

2021年8月5日(木)

<攻撃行動とは>

攻撃行動（反社会的行動）は、他者に対して暴力を振るうなど危害や損害を加えようとして意図的に行われる行為全般のことをいう。つまり攻撃行動は、援助行動（向社会的行動）とは正反対の概念である。攻撃行動と言うと、「殴る」「蹴る」など身体的な暴力をイメージしてしまいがちだが、悪口などもれっきとした攻撃行動になる。

<攻撃行動の分類>

攻撃行動は下記の3つの観点から考えられている。

- ①身体的 — 言語的 （相手の身体に影響を及ぼすかどうか）
- ②積極的 — 受動的 （自分から行動を起こすかどうか）
- ③直接的 — 間接的 （直接相手に向けられているかどうか）

結果的に攻撃行動は、下記の通り上記の3つの観点から8種類に分類できる。

- ①身体的 — 積極的 — 直接的 [突く、殴る、蹴る]
- ②身体的 — 積極的 — 間接的 [落とし穴を仕掛ける、暗殺者を雇う]
- ③身体的 — 受動的 — 直接的 [相手の行動を物理的に妨げる(前に立ちふさがる等)]
- ④身体的 — 受動的 — 間接的 [すべきことを拒否する(与えられた仕事をしない等)]
- ⑤言語的 — 積極的 — 直接的 [相手を侮辱したり、非難したりする]
- ⑥言語的 — 積極的 — 間接的 [相手の悪い噂を流す]
- ⑦言語的 — 受動的 — 直接的 [話をしない]
- ⑧言語的 — 受動的 — 間接的 [他者の不当な扱われ方(いじめ・パワハラ)を傍観する]

<攻撃行動起因の理論>

そもそもなぜ人は他者を傷つけようとするのか？ その原因に言及した理論は1つではない。下記のような4つの攻撃行動説が唱えられている。

- ①攻撃本能説
- ②フラストレーション（欲求不満）説
- ③攻撃手がかり説
- ④攻撃学習説

【攻撃本能説】

攻撃本能説とは、人を攻撃するのは、自分自身の生存の維持と種の保存を目的とした人間の持つ生得的な本能の一つであるとする学説である。人間以外の動物には当てはまるかもしれないが、人間にはこれだけでは説明できない部分もある。

＊ ＊ 攻撃行動 ＊ ＊

【フラストレーション説】

フラストレーションとは、その人が抱えている欲求が何らかの理由により阻害され、満たされない場合に起きる心理的な負担のことである。つまり人は自分の欲求が阻害された状態になると何らかの攻撃行動が生じるという説である。しかし大多数の人たちは、フラストレーションが生じるや否や攻撃行動を起こすわけではない。フラストレーションが大きくなり、いわゆる「爆発」することによって攻撃行動を起こすのである。つまりフラストレーション自体が攻撃行動に必ずしもつながるわけではなく、フラストレーションの程度（**攻撃への準備性**）が整った時に攻撃行動が生じるということになる。またその欲求不満の原因を何に帰属（**原因帰属**）させるかによっても攻撃行動につながるかどうかに影響を与える。

（帰属先となる原因）

①自己中心性 ②怠慢 ③服従 ④事故 ⇒ この順番で攻撃行動につながりやすくなる。

【攻撃手がかり説】

攻撃手がかり説とは、攻撃を連想させるもの（刃物、拳銃、重そうな灰皿、崖の上、暴力的な映画やゲーム、車等）が攻撃へのきっかけとなって、実際攻撃行動が引き起こされやすくなるという説。この攻撃手がかり説は、前出のフラストレーション説と組み合わせられれば、理解しやすい理論になるように思われる。

【攻撃学習説】

攻撃学習説は、攻撃行動が教育や家庭環境（躾等）などにより発達過程で学習されるとする説である。攻撃行動は直接的に学習される場合もあるが、他者の攻撃行動を観て、それを真似ることによって学習される場合もある。この間接的な学習のことを観察学習（モデリング）という。また観察することによって、その行動が強化されることを代理強化という。

<怒りと攻撃行動>

怒りという感情は、最も攻撃行動に結びつきやすいと考えられる感情である。強い怒りを感じた時に人がとる攻撃行動は下記のように分類できる。

1. 直接的攻撃行動

①言語的行動 ②利得剥奪的攻撃 ③身体的行動

2. 間接的攻撃行動

①悪口 ②陰口 ③所有物破損

3. 置き換え的攻撃行動

①物への八つ当たり ②人への八つ当たり

4. 非攻撃的行動

①通常の活動 ②第3者への起こった事柄についての会話
③相手への起こった事柄についての会話

＊＊ 攻撃行動 ＊＊

この怒りと攻撃行動で一番驚かされる結果は、怒りを感じた時に、人が最も多く取る行動は・・・
「冷静に何もせず、通常の日常生活を続ける」ということである。

<対立的状況と対立的行動>

私たちが、私たちの周囲の人間関係の中の人の行動を分析する場合、その人の性格や人格にその行動の原因を帰属させようとする傾向が強い。しかし実際にその人と接してみると、全く正反対の印象を抱く人もいる。なぜこのような現象が起こるのであるだろうか？人は、自分の個人的な特性だけであるべき行動を決定しているだけでなく、その時の社会的状況にも影響を受けながらとるべき行動を決めていると言える。よって人は、その社会的状況によって対立的にもなったり、協力的にもなったりするのである。つまり心理学的にも「人は見かけに依らない」と言えるのである。

<敵意帰属バイアス>

相手の言動の中に必要以上に自分に対する敵意が含まれているとみなす思考パターンのこと。敵意帰属バイアスが強い人ほど、攻撃行動を起こしやすい傾向にあることがわかっている。結果的に敵意帰属バイアスが強い人は、犯罪を犯しやすくなる傾向がある。